

## ＪＣの思い出

今年も我が家の庭にある金木犀の香りが漂う時期になった。私は、金木犀の香りを嗅ぐ度にＪＣを思い出す。理事長もお引受して、本格的に事業計画を立てるために行動を開始したときも、そして１年後に理事長としての責任を何とか果たし、次の理事長にバトンタッチをしたときも、車庫に入れた車のドアを開けると、あたりはいつも金木犀の香りに包まれていた。

ＪＣすなわち青年会議所は、全国７５０以上の組織体で構成され、それぞれの地域に合った活動を展開している。県別、地区別にも組織化されており、その頂点に日本青年会議所がある。また世界７４ヶ国でも青年会議所運動は展開されており、来年は神戸で世界大会が催される。基本的に身分の上下はない。我々一地方の理事長も、日本青年会議所の会頭も同等である。年齢は２０歳から４０歳までの青年経済人で構成されており、４０歳を越えると退会しなければならない。卒業したものをシニア会員というが、特別な活動もしないし、拘束もされない。現役メンバーは全国で６万人位で、シニアメンバーはおそらく１０万人を越しているものと思われる。

青年会議所は、奉仕、修練、友情という三つの信条を掲げ、明るく豊かな社会を創るのを目的としている。友情は何人かの間人間が集まれば、勝手に出来上がるものだが、それが真の友情かどうかとなると、また別のものであろう。友情論をぶつ気はないが、考え様によると、まことに得体の知れないやっかいなものだと思う。例えば、あれほど親しかった友人でも、お金の貸し借りひとつで壊れていくのを私は何回も見ている。本当の友人は、生涯にひとりか、せいぜいふたりだと思う。そうは思いませんか？

修練とは、何か抹香臭い感じがするが、自己開発と置き換えれば良いと思う。大変大きなテーマであり、たかだか４０歳迄に自己を開発できる訳がない。唯、自己開発をしなければ、自分自身

の人生は勿論、会社を経営していくことが出来ない、と云うことを認識すればいいのである。そして、その為には何をすれば良いのかを、知るきっかけを掴めばいいと思う。

奉仕は容易には理解できない代物である。私も、奉仕などは金持ちの暇人がするものだと思っていた。こちらが奉仕してもらいたい位だと思っていた。どの地方の、どんな小さな青年会議所にも、必ず社会開発委員会があるはずである。なければ、その青年会議所の存在価値は無いに等しい。それほど、重要な委員会なのだが、実は最も面白くない委員会でもある。自己開発が出来ない者が、社会を開発できる訳がないのである。しかしながらまた逆の発想も成り立つ。社会を開発しながら、自己開発していくことは可能である。奉仕は、私に最も深い影響を与えたテーマだった。今、私はそのテーマに向かって挑戦し、実践をしている途中である。富士山に例えるなら、一合目か二合目、あるいはそれ以下かも知れないが、登りかけた事だけは間違いないと思っている。何故なら、経営には奉仕の含まれる部分が多いからである。極論するならば、全てがそうなのかも知れない。お客様に対する奉仕、従業員に対する奉仕、下職に対する奉仕、世間に対する奉仕。

私は、32歳でJCに入会をした。当時、新光工事で暇を持て余していた頃だった。入会3年目に日本青年会議所に出向をしたり、ゴルフ同好会のお世話をしたりして、誠に快適にJCライフを楽しんでいた。4年目に或る委員会の委員長を頼まれ、受けることにしていた。丁度その時である。メーカーからの要請があり、新光ロイヤル住宅へ行く事になったのである。取締役近畿統括部長はJCを退会することを強く申し入れた。私は、迷って尊敬する神山先輩に相談をした。神山氏は、わざわざなんの得にもならないのに、取締役近畿統括部長に会い、JCの良いところ、私のJCに於ける存在価値について話をした。結局JCに対しては休会と云う形を取り、メーカーには退会すると言って、嘘をつくことにした。私が受けていた委員長は、別の人が変わってもらった。

3年で新光ロイヤル住宅も一応目処がつくところまでになっ

たので、J Cに復帰した。最終年度に当たる40歳のとき、第2代理事長をさせて戴いた。3年間のブランクがあったので、まさか理事長をさせて戴くとは夢にも思わなかった。有り難くお引受をした。

三木露風の生誕地であるこの龍野市では、4年前から街興し事業の一貫として、童謡祭を市を上げて開催していた。その提案をしたのも当青年会議所だった。私は一応の区切りとして、この童謡祭を広く認めさせる上で、日本青年会議所に褒賞の手続きを取る事にした。同じ狙うならば一番上の賞を、と意気込み、特別委員会を設置し取り組んだ。近畿地区では、ベストオブベストを獲得した。その時の全国大会は高知県で催された。私は褒賞委員の前で、冒頭に「ゆうやーけ、こやけーの、赤とんぼー」と歌い、童謡祭がいかに優れた事業であるかについて熱弁を奮った。私は一番になることを信じて疑っていなかったもので、表彰式の後の懇親会に着るべく、借り物だったがタキシードまで用意していた。結果は3位までにも入れず、桂浜で涙を流す羽目になった。足りなかったのは、熱意でもなければ、事業の奥の深さでもなく、根回しだったのである。

J C生活9年間。いろんな思い出がある。書き上げればきりが無い。老婆心ながら、一言だけ言わせていただくなれば、どうか籍中に奉仕という概念を理解していただきたいと思っている。私は、J Cに大きな恩恵を受けたと感謝している。現在、私どもの企業に取り組んでいるギャラリー、少年サッカー、FNA戦略等は、もし私がJ Cにお世話にならなかつたら、決して考えもつかなかった発想である。

また来年も、金木犀の香りが漂う季節が来るであろう。そして再来年も...